

三陸の近景 (宮城県名取市編)

「14時46分」

「三陸の近景」欄で17回にわたり岩手での仮設住宅居室訪問活動を取り上げてきました(※本願寺派総合研究所ホームページに掲載)。今回は特別編として名取市での活動からの「近景」を、同研究所の安部智海さんに書いていただきました。

宮城県名取市での仮設訪問活動は岩手に先立って始まりました。名取市の仮設住宅には、ゆりあげ 閑上地区にお住いだった方が多くおられます。当時、避難所となった閑上中学校には、震災の起きた「14時46分」で止まったままの時計が今も残されています(写真)。止まったままの時計と、震災から4年が経過しても更地のまま広がる風景は、何度訪れても、そこだけ時間が止まっているような錯覚を抱かれます。

「津波が来た時、黒い空が襲ってきたのかと思った」「あの時、たまたま流れてきた屋根につかまって、助かったんだよ」「あの日の夜は、真っ暗で、とにかく寒くてね」

4年経った今も震災での体験をたびたび聞かせていただきます。「14時46分」は、お一人お一人にとって忘れられない時間となりました。



「14時46分になるまで落ち着かない」と言われる女性と出会いました。毎日、14時46分が近づいてくると、「今ごろ息子は、まだ生きてんだ」と思えて、居ても立ってもいられなくなるのだそうです。「あの時こうしていれば」と次々と考えが巡り、自分でもどうしようもなくなる中で14時46分が過ぎ、「あぁ、もう間に合わない」と。



そして、ようやく諦めがつくのだと言われました。

街に出ても、息子さんと同じくらいの年齢の男性を見ると、「生きてたら、今頃あんだったかな」と息子さんのことばかりが思い出されるそうです。

「親にとって、子どもを亡くすことは、何よりつらいことなんです」と語られる女性は、息子さんのことを思い出されては、幾度悲しい思いを繰り返されたことでしょう。息子さんのことを思わない日などなかったはずです。

「震災から時間が過ぎれば過ぎるだけ、どんどんあの子から離れていくようで…。いっそ私もあの子と一緒に流されればよかったのに」。絞り出すように出た言葉が、今も私の胸に突き刺さっています。



閑上中学校の時計は、今もあの日のまま14時46分を指しています。確かに私たちは、あの震災から4年という歳月を経験しました。毎年「震災から何年」と増えていく数字は、ただの数字ではないように思うのです。

※本紙姉妹誌「大乘」で4月号から安部さんの「ことばの向こうがわー仮設住宅を訪ねて」を連載します。